

# 座 視

## 一人ひとりに基礎学力と自習力を

### 子どもが自ら伸び、未知に挑戦していけるように



日本公文教育研究会  
小西教雄

「どんな時代が来ても生き生きとした人生を歩んでもらいたい。本人が望む道を突き進んで欲しい」と願う親の気持ちは、昔も二十一世紀になった今も変わらないのではないだろうか。

最近の日本の現状を見ると、学級崩壊・不登校・学力低下・青少年犯罪など、子どもにかかわるさまざまな問題だけでなく、大人の問題も同様に多く発生し、連日のように報道されている。

かつて日本は、教育立国として人材育成に注力してきたが、一九八〇年から国は「ゆとりある教育」を実施し始め、学校で教える内容を徐々に削減し、「わかる」ことに重きを置き、二〇〇二年度からは「生きる力」をつけることを主眼として教科書の改訂を行う。

このお手本になったのが米国の「ゆとり教育」で、当時の米国は先進国病、ベトナム戦争後遺症などで国際競争力が低下、失業率が上昇し、教育の荒廃、青少年犯罪の増加などの諸問題を抱えて、国の再建は「教育改革」しかないとい力を入れ、最近までの再興の基となった。

さて、話を「生きる力」に戻すと、文部科学省の定義はおおよそ以下のとおり。

自分で課題を見つけ、学び、考え、自ら判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力

自らを律しつつ、他人と協調し、豊かな人間性と、たくましく生きるための健康・体力

この答申を受けて作成された新学習指導要領の柱は、完全週五日制の実施、学習内容を現行から三割削減、「総合的学習の時間」の新設、の三点だが、本当にこれだけで子どもたちが生き生きとした学校生活を送り、「生きる力」をつけることができるであろうか。

#### 反復練習による習熟も大切

平成十二年十月にNHKで「徹底反復・ある公立小の挑戦」という番組が放映された。兵庫県山小の試みで、その後多くの教育関係者が取材をされたそうである。

十年前に中学生の学力低下に対する改善要望に小学校側がこたえる形で、「読み、書き、計算」を徹底的に練習・習熟させる独自施策に

取り組み、家庭からは「食事・生活リズム化」の協力を得ている。独自施策を具体的に挙げると、算数の授業前に「一〇〇マス計算」を実施し、既習内容の習熟度向上を図るために「時間」を目安にし、六年間で習う漢字を熟語にしてその八割を卒業までに覚えさせ、外国名を八十力国覚え、パソコンの入力練習を繰り返し練習し習熟度を上げる、などである。

山口小がこの授業を開始した十年前は「個性重視」「考える力をつける」教育に反するとの声も多くあつたそうである。しかし、「読み、書き、計算」は不可欠な基礎学力であり、「習熟させるには徹底した反復練習により、『わかるからできる』レベルに引き上げないと、結局は『考える力』は育たないことが分かった」と、この授業を中心となって推進した陰山先生は語っている。この結果、山口小の生徒の八割が「授業・勉強・学校が楽しい」と回答している。

実は「英語力」も今後、不可欠な基礎学力になると言われている。二〇〇二年度からの「総合的学習」では小三以上から週に二〜三時

問、福祉、健康、環境、情報、国際理解をテーマとし、教科を超えた内容や地域の課題などを体験を通して学ぶことになる。この国際理解の中に「英会話」があるが、中学内容の先取りではなく、「歌、ゲーム、簡単なあいさつ、寸劇などを使い体験を通じて英語に触れ親しむこと、外国の生活・文化への関心を誘うこと」が目的である。

では、今の日本の英語環境はどうなっているかというところ、一部のエリアに任せておけばよい」という声もあるが、今後、環境・食料・人口・エネルギー等の問題が山積し、世界の人々と協力し解決しなければならなくなった場合、その時に必要なのが共通語とし



教室で生き生きと学ぶ子どもたち

ての「英語力」ではないだろうか。テストや受験にとどまらず、社会で本当に役立つ「英語力」を今から真剣に考えておかないと、日本は世界の「お荷物」になってしまいかねない。最近ではパソコンの普及により、英語が世界共通語になり、インターネット上の情報の八割以上も英語である。その上、英語を公用語とする国の数は六十に達し、世界人口の三分の一から四分の一の人々が日常的に英語を使用している。今後は日常会話レベルの英会話力ではなく、英語を聞いてわかり、読め、表現できる力をつける学習が大切であると考える。

### 自ら学ぶ力に有効な個人別学習

今後、どんな時代がきて、どんな社会になっても、子どもたち一人ひとりが目を輝かせ続けていくには、高い基礎学力と「自ら学ぶ力」を身につけさせたいものである。

子どもたちへの教育のあり方を表現した言葉に、「魚を与えるのではなく、釣り方を身につけさせる」というものがある。子どもの側から考えると、他人から魚をもらうのではなく、自分で釣り方を覚えれば自立できる」という意味で、すなわち、「魚の釣り方」自ら伸びる力「自ら学ぶ力をつける」ことが大切ではないだろうか。

この「自ら学ぶ力」をつけるには、個人別学習が最も効果的である。個人別学習とは、学年・年齢にかかわらず、今の自分に応じた内容の学習を通じて、わからなくなった時に

は、わかる内容まで戻り学習をし、学年・年齢の枠を越え能力を伸ばしていく学習である。芸術やスポーツと同様に学習でも一方的に教えられるのではなく、自分の力で学習できることが「個人別学習」である。このように、個人別学習を通じて高い基礎学力を「徹底した反復練習」で習熟し、「わかるからできる」状態になってくると、子どもたちは、「自分はやればできる」「繰り返し返せば絶対にできる」という自信を持ち、それが「自己肯定感」につながり、夢や目標に向けて、未知のことにも挑戦していける「自ら学ぶ力」が育っていく。これこそまさに「生きる力」そのものではないだろうか。

しかし、大切なことは、大人が「何かに挑戦する姿」というお手本を提示し、子どもが努力した際に自信が持てるように、「認めて、褒める」ことである。子どもの身近にそうした大人がいることが、子どもを「自ら伸びていくように」導くことになるのではないだろうか。

### 小西 教雄

(株)日本公文教育研究会山形事務局長。  
1959年大阪府生まれ。  
公文式の考え方をまとめた小冊子「生きる力～21世紀の子どもたちのために～」があります。ご希望の方は、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、下記までお申し込みください。  
〒990-0039 山形市香澄町3-7-1  
朝日生命山形ビル2F  
(株)日本公文教育研究会山形事務局「生きる力」係  
TEL: 023-642-1151